

## 龍の引越し大作戦

瀬戸内町立西阿室小学校 六年 酒井 晴加

車窓から、ゆつくりと流れていく夜空。赤に青、黄色にオレンジの宝石が散りばめられている。「やっぱり奄美は最高だな。」旅の疲れで、迎えに来てくれた祖母の車に乗り込むなり、後部座席に横たわった。

祖母と私を乗せた車がトンネルに入った。オレンジ色の電灯が私たちの車を照らし、道案内をしているかのようにトンネルの出口に導いてくれる。ゴトン、と車はずんだ。トンネルをぬけたのかな、と思いついて体を起こした。視線を窓の外に向けると、体中に電気が走ったようにビリビリ感じた。車の前を横切って行くクジラの親子がいる。開いた窓から、私に手を伸ばしているのはカメラ。いつの間にか色鮮やかな魚たちが車を取り囲んでいる。もっと驚いたのは、一緒に乗っていた祖母がいない。なくなっていることだ。訳が分からなくなっている私に、カメラが話しかけてきた。

「ようこそ、アマミブルーへ。」

そう言って、さらに手を伸ばしてきた。私はこわごわあく手をしたが、とても温かかった。

カメラに誘われて、車の外に出てみた。自分の体がふわ

ふわ浮いているのを感じた。

「うみ、これからちょっと協力してもらいたいことがあるんだ。実は、この奄美に引越してきたという龍がいるんだ。」

「ええっ、り、り、龍。龍って、架空の生き物なんじゃないの。」

「架空ということにしとかなないと、みんなが騒いで大変だろ。」

「それもそうだけど、本当にいるなんて思ってもみなかった。で、何を協力したらいいの。」

こんな経験は二度と無いかも、と少しわくわくしながら私は協力することにした。

その龍はお腹に赤ちゃんがいて、暖かい海で子どもを産み、育てたいそう。でも、寒い地方から奄美の海に来るまでには、数多くの危険生物がいて、無事にたどり着けるかどうか分からない。だから、私たちが龍を守るための安全な道を作る、という作戦だった。それぞれの特技を生かした持ち場担当を決めた。龍はすでに奄美の海に向けて出発しているとのことだ。私たちは早速実行に移った。

まずはスターターのクジラ。冷たい北の海から一緒に出発し、今、龍の真後ろにいるそう。何と、このクジ

ラ、尻尾振り大会で優勝した経験があるほどの尻尾力の持ち主。尻尾を振り、龍を南の海まで進ませる作戦。さあ、尻尾を一振りする準備に入ったクジラ。力をためて、えいっ。龍の体は波に乗って、いつきに奄美近海までやってきた。これはもう表彰に値するほどだ。二番手はコブシメ。龍にちよつとでも近付こう者がいたら、真っ黒い墨を吐き撃退。うん、これもナイスイディア。全身真っ黒になったドクウツボが、くるくる回っている間にさよならあ。

次にバトンが渡されたのは、「小さくても力もち」のアヤビキ軍団。龍の周りをみんなを取り囲み、一匹の巨大魚に変身。国語の教科書に出てくる「スイミー」みたいだな。大きく迫力がありすぎて、だれも近付いてこない。四番手は海の人気者、スガリ。みんながうっとりするほど手足が長い。キレッキレのダンスで視線を集め、そのすきに龍を進ませるといふ作戦。集まってきた若者たちが、個性豊かなダンスを繰り広げ、にぎやかになったところを、龍がそうと抜けてきた。さあ次はアンカーのカメと私。カメの背中に乗った私がホラ貝を吹く。「フオーツ、フオーオー」と、初めてにはいい音が出た。その音を聞いたみんなは、龍のために道を開けてくれた。何だか気持ちいいな。さあ、もうすぐ到着だ。

到着地点には、アマミホシゾラフグが、すてきなもようのふかふかベッドを用意して待っていてくれた。龍はみんなが見守る中、尻尾がくるんとして愛らしい龍の子を無事に産んだ。そう、タツノオトシゴだ。みんなでつないで誕生した命。最高にうれしい。感動のあまり、ふいに涙が出て目を閉じた。

次に目を開けると、車の中にいた。あれっ、いつの間にか眠っていたんだ。何となく車の中を見回すと、足下にホラ貝が転がっていた。あくびをしたせいかな、私の目はぬれていたけれど、気にすることもなく車を降りた。

翌日、近くの海に来了。毎年、この海にもぐるのが目的で祖父母の家に来てくる。スーツとすべり込むのが目に海中にもぐった。目の前に広がるのは、色とりどりのゆれるサンゴの間で群れを作っているアヤビキ。海底には大きなコブシメが、体色を変えて休んでいる。今日は私を歓迎しているかのように、様々な生き物が見える。その中に、かわいいタツノオトシゴを見つけた。私に尻尾でくるんとあいさつをしたみたいに見えた。その奥に、見たことない長い生き物が一瞬だけ見えた。海のドラゴンかも。そう思ったけれど、おかしくなって向きを変え、フィンを力強くつけた。